



公益財団法人

国際文化フォーラム
THE JAPAN FORUM

国際文化フォーラム通信

2011年4月

no. 90

学びを深める 交流

●異なる背景をもつ相手と関わり、ともに考え、ともになにかを創る体験は、子どもたちがこれからグローバル社会で生きていく力を身につけていくことにもつながります。●教師は、子どもたちがどのような力を身につけることをめざし、どのように交流活動をつくっているのでしょうか。また、そこに参加する子どもたちは、どのような過程を経て、なにを学ぶのでしょうか。

【特集】

学びを深める交流……………1

■「建設的妥協点」を探りながら
人と関わる力を育てる

■Willingness to Communicate
—地球時代のコミュニケーション能力を育む

■やってみよう、学校間交流学習!

■カベを乗り越えて交流を実現しよう!

TJFニュース……………12

公益財団法人としての新たなスタート

広がる中国語講座の開講

「話してみよう韓国語」が行われました

海外の高校生から届いたフォト&エッセー

……ほか

お知らせ……………16



「建設的妥協点」を 探りながら 人と関わる力を 育てる



今の子どもたちは、地域コミュニティとのつながりが希薄になり、核家族や一人っ子が増えていることで、異年齢と交流する経験が限られています。他者との衝突を避けようとする傾向もみられます。しかし、社会に出ると、職場や地域でさまざまな年齢の人たちとつきあわざるを得ませんし、自分の思い通りにいかないこともたくさんあります。さらに、グローバル化、情報化が加速度的に進んでいく社会では、つきあう相手も多様です。わたしは、これからの社会を生きる子どもたちにとって、自分と異なる人たちと自分なりに調整をつけながらつきあっていく力をつけることが大切だと考えています。交流は、生徒にとって、コラボレーション(協働)、コンフリクト(衝突、葛藤)、そしてコンフリクトを打開する「建設的妥協点^{☆1}」を見出すプロセスを体験できる非常に有効な手段です。羽衣学園中学校・高校では、さまざまな交流プロジェクトに参加するとともに、ふだんの授業で交流に必要な基礎的な力をつける取り組みを行っています。

1 face to faceの協働作業

本校が参加しているプロジェクトの一つに、7年にわたって参加しているWorld Youth Meeting(WYM)があります。WYMは、異なる国の学校がペアになって協働でプレゼンテーションをつくりあげ、発表する活動です。日本のほか、インドネシア、韓国、カンボジア、台湾、フィリピン、マレーシアなどの学校が参加しています。本番の活動だけでなく、事前事後も含め下記のような流れで活動します。

①大テーマ決定(4月)

参加校の教師が協議してその年の大テーマを決定する。

②事前交流(5～7月)

ペアになった海外の学校と、メールやテレビ会議(skypeなど)を使って話し合いながら、具体的な発表テーマをしぼりこみ、リサーチを行う。生徒だけでなく教師も意見交換をする。(これまでのテーマ例:「What does the word “Happiness” mean to you?」「Building human bonds in the internet age」「Sustainable international cooperation」など)

③本番(8月)

日本で顔を合わせ、お互いの意見を調整しながら英語のプレゼンテーションを協働してつくりあげ、発表する。そのほか、世界遺産の見学やホームステイを行う。

④事後交流

メールやテレビ会議を使って、振り返りや感想、写真の交換などを行う。

●9月以降、上記と同じように、事前交流(発表テーマのしぼりこみ)→本番(12月、台湾)→事後交流の活動を繰り返す。

事前にICTを使って相手校とある程度、活動の方向性を話し合っておくことで、本番では深いレベルの交流が可能になります。さらにここでは、顔を合わせたコラボレーションがとても重要です。実際に顔を合わせて作業を始めると、プレゼンテーションで自分たちが言いたいことをどうしても削らないといけないうきにどこを削るかで意見が異なったり、相手に自分の言いたいことが伝わらなかったり、コンフリクトが生じます。そこで、一つひとつお互いの「建設的妥協点」を探りながら、プレゼンテーションをつくりあげていくこととなります。その後、練習を重ねて本番に臨むのですが、言いたいことが言えなくてやしい思いをしたり、自分の英語力不足を痛感したりします。ほかのグループの発表のすばらしさに落ち込んだり、刺激を受けたりもします。こういうふう実感をもった本物の経験、自分の思い通りばかりにはいかない経験、そして目の前にいる相手に真剣に向きあい課題に取り組む経験をすると、生徒は劇的に変わります。ほかのメンバーといっしょに最後までやりとげた達成感が自信につながり、ほかの活動でも大勢の前で積極的に意見を言ったり、質問をしたり、自分から司会やリーダーを志願したりするようになります。また、身近な友だちだけでなく、さまざまな人に対して、相手のことを配慮した言いかたができるようになってきます。相手校のメンバーとの個人的な交流を続けたり、大学で交流相手の国の言語を専攻したり、スタッフとしてプロジェクトをサポートする卒業生もいます。

2 ICTを活用した交流:日米同時理科実験

実際に会う機会がなくてもICTを活用すれば交流学習は可能です。本校と米国ニュージャージー州メモリアル中学校との交流では、2003年から毎年、大阪大学の協力を得ながら、他教科と連携した交流学習を行っています。2005年には、中学3年生の理科とホームルームの時間を使い、情報科、理科、英語科の教員が協力して、理科の実験データを交換する「同時学習」を行いました。

日程や実験内容などは、プロジェクトを始めてすぐに本校とメモ

アル中学校の教師、大阪大学のスタッフのメーリングリストを立ち上げ、必要に応じてテレビ会議(skype)も利用しながら決定していきました。実験当日は、大阪大学大学院生のサポートを得ながら、同大学が開発した「ハイパーミラー」という遠隔対話システム(離れていてもすぐ隣のように画像を合成できるシステム)を使って、日米双方で提案した実験を同時に行ったほか、お互いの学校生活について紹介・質問をしたり、プレゼントを交換したりしました。実験終了後は、理科、情報、英語の授業で振り返りとまとめをして内容の理解をさらに深め、英語で感想を書いて相手校に送りました。(プロジェクトの進め方の詳細はウェブサイトをご参照ください。

<http://link.tjf.or.jp/F90PDF1>



3 交流に必要な基礎的な力を育む

本校では、教科のなかでも、年間を通して、交流に必要な力の育成に取り組んでいます。生徒が教科で培った力を交流プロジェクトで発揮し、それをまた教科で発展させていけるよう意識して計画、実施しています。ユネスコ・世界寺子屋運動^{※2}を取り入れた実践もその一つです。教科の「情報」と総合的な学習の時間を使って、書き損じハガキの提供や募金を呼びかけるリーフレットをつくり、そのリーフレットを使って寺子屋建設の支援活動を行うプロジェクトに取り組んでいます。1年を下記のように四つのフェーズに分け、考える力や調べる力、コミュニケーション力、コラボレーション力、課題発見・解決力、プレゼンテーション力、創造力、ICTスキル(各フェーズで育成するスキルは〈 〉に記載)といった交流に必要な力を段階的に育成しています。

①学びのフェーズ(5～7月)

ユネスコやユネスコ・世界寺子屋運動について、ウェブで調べたり、ゲストティーチャーから話を聞いたり、ビデオを見て学んだりする。生徒にリアルで必然性のある課題を与え、自分たちの生活を振り返りながら自分にできることは何かを自問し、切実感や使命感に突き動かされて取り組む場をつくりだす。

〈コンピューターの基本操作、インターネット上の情報の検索・分析・判断〉

②創作のフェーズ(8～10月)

自分の思いを伝えるリーフレットの制作。ラフスケッチからブラッシュアップを経て完成にいたる過程で、自分が伝えたいことは何なのか、誰に伝えたいのか、何のために制作するのか、伝える相手や目的を常に意識し、考えながら、自分なりに発想し、工夫をしていく。

〈画像編集ソフトの操作〉

③活動のフェーズ(10～2月)

リーフレットを活用し、書き損じハガキの回収活動を校内と地域で展開する。自分たちの制作したリーフレットが、実際に誰かの、または何かの役に立つと実感できる、社会とのつながりをもった学習活動のなかで、子どもたちの自己実現や自己変革が促される。

④振り返りのフェーズ(3月)

活動全体を通して学んだことを振り返り、パワーポイントなどにまとめて発表する。

〈プレゼンテーション・ツールの操作〉

4 「つながり・学びあい・思いやり」

生徒が交流プロジェクトに参加するとき、教師はサポーター、ファシリテーター、コーディネーターの役割をにやいます。ときには生徒が自分たちで考え解決していけるよう、傍観者として見守ることも大切です。

わたしは、交流を通して、生徒同士の「つながり・学びあい・思いやり」を育てることを心がけています。生徒にはいつも相手のことを考えるよう促します。たとえば、自分だったらどういうふうに接してもらおうと安心し、うれしく思うかを考えて、相手に接するよう伝えています。そうやって相手を思いやる行動を積み重ねていくことで、互いの考えを尊重し、学びあう関係ができてくるからです。他者と関わりながら、モノをつくっていく喜び、人のためにつくす喜びややりがいを経験することから生まれる多くの学びは、生徒たちの一生の宝となり、生き方の根っこになります。今後も生徒が本物の学びを体験できる交流プロジェクトに取り組んでいきたいと思っています。 [よねだ・けんぞう]



※1 一人ひとりが自分の意見を論理的に伝え、相手の意見を聞き、時間をかけてお互いが納得できるポイントをすり合わせていった結果生まれる妥協点のことを筆者は「建設的妥協点」と呼んでいる。

※2 貧困や戦争などで学校に行けず、読み・書き・計算など、生活の基盤となるリテラシーを身につけられない子どもたちに、学びの場(寺子屋)を建設して支援する運動。詳しくは、www.unesco.jp/contents/teraをご覧ください。

Willingness to Communicate

地球時代の コミュニケーション能力を 育む

奈良女子大学附属中等教育学校教諭

南
美
佐
江



急激なグローバル化により多文化共生社会が現実となった「地球時代」に必要なコミュニケーション能力、つまり、異文化を理解、尊重し、多様な他者と共生できる能力を育む教育は、WTC (Willingness to Communicate: 他者との関係を築くために対話する意志) を育てることを目的とすべきであり、国際交流はそのための有用な機会となります。奈良女子大学附属中等教育学校では、2008年までグローバル・クラスルーム (Global Classroom 以下、GC^{*1}) を国際交流の柱としてきましたが、昨年、これまでのグローバル・クラスルーム年次大会 (Global Classroom Conference 以下、GCC) 参加者を対象にインタビュー調査を行った結果、以下のことが明らかになりました。

- ① 外国語や異文化に対する不安感がコミュニケーションを妨げる。
- ② 日本の高校生を抱えるコミュニケーションに対する不安は、外国の生徒との交流に限らず、実は、日本人同士のコミュニケーションでも起きている。
- ③ 国際交流の事前学習を通して身近な異文化に気づき、コミュニケーションの困難さを克服することができる。
- ④ 実際の国際交流の場での異文化接触により国際的志向が高まり、その後のWTCに大きく影響する。

1 外国語と異文化に対する不安

GCC参加者は、選考を通っていることもあり、ほとんどが学校の英語の成績上位者です。しかし、実際の会議の場では言いたいことが言えず、悔しい思いで帰国することがほとんどでした。一般的な日本の高校2年生の英語力を考えれば、相手の言ったことを即座に理解し、それに対する意見をすぐに英語で述べる能力をもつ生徒は多くありません。しかし、以下の生徒のように、その場で発言できるはずのことが言えない場合も多く見られます。

生徒(以下◆) 言おうとしたことをどう切り出せばいいだろうって考えている間に言えなくなってしまい、とても苦しかったです。それを説明できる英語を知っていたのに、自分の意見を述べられなかった勇気のなさを情けなく思いました。

また、ある生徒は、自分が発言できなかったのは英語力のせいだけではなく、「英語がうまくて、大人っぽくて、きれいで、たくましい」他の参加者に対するコンプレックスもあったと言います。教員が思っている以上に、生徒たちが異文化の人びとに対して持っている先入観や不安感は大いなのです。

2 母語でのコミュニケーションへの気づき

国際交流の活動は、参加者たちがふだんのコミュニケーションについて振り返る機会にもなります。

◆会議中に何か考えて発言するっていうことができなかったから、すごくショックで。最初のうちはどうしても語学力のなさのせいにしてたところがあるんですけど、いろいろ考えていくうちに、ああ日本語のディスカッションでも自分は発言できなかったかもしれないって。

「高コンテクスト文化^{*2}」の日本では、そもそも多くのことばで自己表現をすることが少ないし、アイデンティティの形成期にある中高生は、自己の意思をストレートにことばで表現すること自体に戸惑いを覚えます。しかし、今の教育現場では、それ以上に、ことばを使って豊かな人間関係を構築する力がますます弱くなっていることを実感します。

◆ただのおはようとか、バイバイとかいう挨拶ひとつにしても、このぐらいの年頃の子って、いろいろ考えるんですよ。この子とあんまり仲よくないから手振るのはへんかなみたいな。グローバル終わったら、自分から、くだらないこと話しかけたり、できるようになったというか、するようになったというか、人との関わりかたを学んで帰ってきたんだろうかっていう。ああそうか、雑談ってそういえばこうやってするんか、みたいな。

3 身近な異文化と、異文化への近づき

GCでは、これまで表面的な付き合いしかなかったクラスや学年の仲間と約半年間チームとして、プレゼンテーションやディスカッションの準備などをします。もともと国際交流に対する意識の高い生徒が集まるのですが、学校の代表として参加することのプレッシャー、限られた準備期間の中でできるだけよいものを作り出したいという焦り、仲間との意見の食い違いなど、さまざまな葛藤を経験します。その中で、なんとかよりよいゴールにたどり着くための方策を身につけます。

南 意見合わない人もいるわけやん。その時にどういうふうに工夫をしたの? いいものをみんなで作るために。

◆何人かで対立してたんですけど、私たちはこういう考えでこうやってるんだけど、それであなたたちはどう思う、とか、ちゃんと相手の意見を聞いて、嫌だって言ってる理由を聞いて、そうやって相手の話を聞くことで議論を深めていく、一方的に押し付けたりするんじゃないくて。

南 でも、合わへんこともあるやん、最後まで。

◆そうですね。たいていどちらかが納得するか、妥協案を考えるか



というところに落ち着きました。

南 いろんな場面だね。いろんな人と話をする仕方って変わったと思う？

◆変わりましたね。もともと相手のことを聞く方だったんですけど、ちゃんと聞いて理解して、その、理解して返すっていうのを意識するようになりました。

◆自分で言いたいことばかり言うてたらうまくいかへんことがわかって、あるところのフォローをしながらアドバイスという形で批判したり、うまいこと工夫して伝えて、みんなが気持ちよく目標に向かいながらも、言いたいことを言うっていうことが必要やなって。

4 異文化接触による気づきと コミュニケーションの変化

約半年の準備を終え、生徒たちはGCCの開催地へ旅立ちます。そこで異文化接触から生まれるのは、自分への気づき、異文化への興味・関心と、さらなるコミュニケーションへの意欲です。まず、それまでことばを使って自己表現をしてこなかったことに気づき、辛抱強く丁寧にことばを使って伝えあうことの大切さに気づき、さらに、大事なのはことばだけではなく、豊かな人間関係の構築であることに気づきます。

◆グローバル行って、これは言わな損やなって思って、言いたいことを置いていかれると思ったんですよ。自分が発言しないと、その場に僕がいないことになると思って、思ってることはっきり言わなあかんと思ったんで。

南 言うようになったん？

◆工夫しながら言うようになった。

英語に自信満々で臨んだGCCで挫折を味わい、翌年コーディネーターとして再度参加した生徒は、それまでの自分のコミュニケーションのあり方をこう振り返りました。

◆何を言いたいんやろうっていうことを、辛抱強く、っていうと偉そうになるけど、向こうも一生懸命伝えようとしてくれてるんで、言い終わるまで待ってたりとか。面倒くさいって投げやりにならずに、ちゃんと向こうの言いたいことが僕に伝わって、僕もそれに返して、初めてコミュニケーションが成立するんで。だから、最初から最後まで一生懸命聞いて一生懸命言おうって。それがあ意味当たり前なんで。それが当たり前なんやってことに気づいたんも、グローバルの経験があったから。大事なんは英語じゃないって思ったときに、大事なんはそれを使う人の問題やって思って。どっちかの英語が十分じゃなくても、思いやりがあったらなんとかなるわけやし。英語だけに一生懸命になって人とのやり取りをないがしろにする人は、どんなに英語が上達しても何やってもうまいかんやろうなって思うし、それは日本にいて母国語をしゃべっても同じ話で。人と接しないことには自分の世界はそれ以上広がらないんで、もったいないなってい

うのもあるし。何を大事にしなあかんのかっていうことを気づけたっていうことが、いちばん大きかったと思います。

自らのコミュニケーションを見直し、多様な他者との色彩豊かなコミュニケーションを経験した生徒たちは、さらなるコミュニケーションを求めて旅立っていきます。

◆発表できる場が国内だけじゃなくて、もっと広いやんって思ったんですね。自分が頑張ったこととか楽しいこととかを伝える相手が山ほどいるんやって。日本人だけにとどまらなくていいやんって。なんか、日本の小ささを感じたんですよ。他にあと五つも国が来たんで。人数でもそうですけど、それぞれ均等に少数じゃないですか。あるグループが多数を占めることがないんで、自分自身は他の人から見たら少数の中のひとりやんと思って。迎え入れるとか、一対一で話をするとかじゃなくて、みんなたくさんいるところに飛び込んで行ったっていう感覚。

多様な価値観の中に飛び込む喜びを知った生徒たちの多くは、大学進学後も様々な世界へ羽ばたいていきます。彼らのWTCは外国の人が対象とは限りません。

南 「自分の中の変化」って、こんなことが変わったとかありますか？

◆異なるバックグラウンドの人としゃべってみたいな、と思って、機会があれば積極的に。

南 異なるバックグラウンドって、具体的にはどんな人としゃべるん？

◆職業的にですけど、農家さんとか。

「国際交流」というと、「スマートでかっこいい」イメージを抱かれることが多いのですが、実際の国際交流の取り組みは、汗まみれ、泥だらけになりながら、あちこちぶつかって傷つきながらの、地道な活動です。その中で参加者たちは、WTCを高め、着実に地球市民としての資質を身につけていきます。今後も生徒たちの「心の響きあう」コミュニケーションが生まれる場づくりに励みたいと思います。 [みなみ・みさえ]

❖1 GCは5カ国(英国、スウェーデン、ドイツ、チェコ、南アフリカ)と結ぶパートナーシップで、主な活動は年次大会(約10日間)、交換留学制度、ビデオ会議システムを利用した協同授業である。その場限りの「交流ごっこ」にせず、日常的な交流を重ね、生徒中心の交流事業にすることを目標としてきた。

❖2 言語化されない情報が多く、文脈などから読み取ることでコミュニケーションを行う文化のこと。周囲への配慮が大切で、暗黙の情報を「察する」ことが要求される。

やってみよう、 学校間交流学習!

東北学院大学准教授(宮城)

稲垣 忠



学校間交流学習(以下、交流学習)とは、異なる国や地域の子どもたちが、インターネット上のさまざまなコミュニケーション・ツールを活用しながら交流を重ねるなかで、仲間意識を育て、ともに学んでいく活動です。国内交流も国際交流も含まれます。また、授業として取り組む場合も、授業外で取り組む場合も、教師が何らかの形で介在しているのが交流学習のポイントです。交流活動の種類は多種多様ですが、大きく[表1]のように分類されます。

[表1] 交流活動の種類

交流体験	交流体験をすること自体が主目的。交流を通してコミュニケーション能力や表現能力の育成を図る。
実践報告	交流校それぞれの学級・学年などでの実践をもとに、話し合いや発表をすることで学習を深めていく。交流を通して、学習内容を掘りさげ、自分たちの活動を内省する。
共通活動	共同観測、共同調査など、調べ方のフォーマットを提供し、参加校が調査報告をする活動を中心とする。ウェブサイトや蓄積されたデータを一覧・比較できる。学校名・所在地・連絡先などの情報を表示したり、ブログなどを設置することで、コミュニケーションがおこるようにデザインされていることも多い。
協働制作	参加校の間で絵やウェブページなどを「協働」して作品にする活動や、オフラインの交流イベント開催のため、企画・運営を生徒たちが行う活動。交流して「いっしょに何かする」ことを重視している。

[表2] 教師のねらい

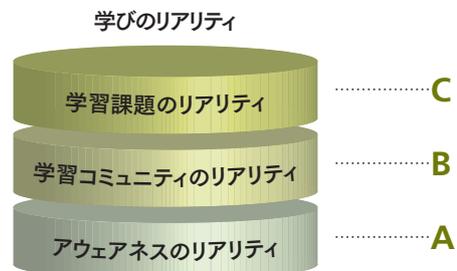
コミュニケーション力	相手に伝わるように発表する、話し合うなどのコミュニケーション能力。
情報活用能力	電子メール、テレビ会議システムなどのコミュニケーション・ツールを交流場面にいかすことで、情報活用能力の育成を図る。
人と関わる力	さまざまな人びととの関わりを通して、相手を理解し、自分を表現し、人間関係を築いていく力。
学習を追究する意欲	交流テーマについての意見交換を通じた学習の広がり・深まりを求める。
他地域や異文化を理解する力	交流を通して、相手の国や地域、文化を理解したり、自分たちの国や地域、文化、学校を再認識する。
協同作業をする力	共同制作、イベントの共同開催といった活動を通して、互いの役割分担、コーディネートなどコラボレーションの方法そのものを学習課題とする。

交流学習で育つ力

[表1]に挙げた多種多様な交流学習の活動を通して、教師は、子どもたちにどんな力を育てようとしているのでしょうか。100校プロジェクト(www.ccc.or.jp/e2a/e2/100kou.html)とEスクエアプロジェクト(www.ccc.or.jp/es/E-square)で実践された126事例を抽出・整理した結果、おおよそ[表2]の六つの力に分類されました。

[表2]にまとめた六つのねらいは、教科書・放送番組・インターネットなどのメディアで調べたり、専門家や地域の大人に教えてもらうなど、交流学習以外の手段でも達成できます。しかし、交流学習では、それ以上に、ほかの国や地域の人の存在を認識(アウェアネス)し、コミュニケーションできたという実感[図1-A]、いっしょに学習をすすめてきた仲間(コミュニティ)だからこそ信頼関係[図1-B]、国や地域の違う子どもたちから教えてもらったり、いっしょに気づいたりした内容の確かさ・深まり[図1-C]、などを得ることができます。

[図1] 学習者が得るもの



こういう国や地域を超えた「学びのリアリティ」が原動力となり、子どもたちの学習動機をさらに高めることができます。学びの内容をより実感をもって理解したり、同じ年代の(けれども異質な)子どもたちの間で分かちあったりする手段が交流学習なのです。

ここでの教師の役割は、子どもたちを学びのリアリティが実感できる場面に導いていくことであり、交流のストーリーをデザインし、交流の目的を示し、子どもたちのコラボレーションを引き出すことにあります。

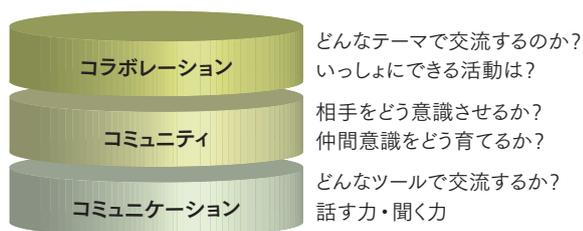
交流学習をつくる

交流学習には、一つの学校や一つの教室の中だけの授業にはない、新しい要素がたくさんあります。子どもたちだけでなく、教師自身

も他校の教師や関係者と協力して授業やプログラムをつくるなど、従来の授業では得がたい経験をすることができます。一方でそれは、「やってみたいんだけど、何が起るのかよくわからない……」と、教師に不安を抱かせる要因にもなっています。

交流学習がどんなものか見通しをもつには、**【図2】**の三つの視点から考えてみるといいと思います。コミュニケーションは、ブログやテレビ会議などのメディアを使ったやりとりを積み重ねて、ネットワークの向こう側に相手がいることに気づかせる段階です。コミュニティでは、自己紹介に始まり、学級間、グループ間、個人間の関わり方をデザインして、いっしょに学ぶ共同体としての意識をもたせます。そして、コラボレーションは、交流の内容や交流のゴールを考えてカリキュラムを設計し、交流内容を学習として深めていく段階です。

【図2】学校間交流学習の三つの要素（活動の視点）



交流学習はこの三つのレベルが同時進行する学習

次に、交流学習づくりの大まかな手順を示します。

I. 始めやすいパターン

まったく初めて取り組む場合、まず不安なのが相手を探すことでしょう。見つかったからといって、果たしてうまく交流できるのか、テレビ会議などは使いこなせるのか、不安の種はつきません。TJFの「つながー」(www.tsunagaaru.com)を含め、さまざまな団体が学校向けの交流プロジェクトを実施しているので、最初はそういうプロジェクトに参加してみるのもいいかもしれません(p.8[もっと知りたい方へ]参照)。

1 ■ 知り合いの先生と始める

交流学習は相手がいないと始まりません。ところが、この相手探しがなかなか難しいのです。インターネットで探して、「突然ですが、交流しませんか」と呼びかけるのも勇気がいりますし、いい返事がもらえるとは限りません。そこで、はじめは知り合いの先生、できれば直接会って打ち合わせができる先生をお勧めします。研究会の仲間、前任校の同僚の先生、姉妹校や交流校の先生など、知り合いの先生に「ちょっとおもしろいこと、いっしょにやりませんか」と声をかけてみましょう。

2 ■ 教科で取り組む

相手が決まったら、「何をテーマに交流するか？」が肝心です。「とりあえず自己紹介でもして……」と始めてしまうと、本当に自己紹介だけで終わってしまうことしばしばです。そこで、交流する「ネタ」がわかりやすく、学習の目的(=交流の落としどころ)もはっきりさせやすい、教科を通じた交流を始めてみましょう。1ヵ月未満の短期集中の活

動から始めてみるといいと思います。

3 ■ 大まかな見通しをもつ

テーマと交流の落としどころが決まったら、時間ごとにどんなことをするのか、大まかなタイムテーブルをつくってみましょう。

初めて取り組む場合、途中で思うように進まなかったり、方向修正がおきたりすることもあるはずですが、それを楽しむくらいの気持ちで臨むのがいちばんいいのですが、あらかじめ大まかにどんな流れにするのか打ち合わせておくと、見通しをもって交流できます。また、この「見通しをもつ」ためにも、まず短期の交流から始めることをお勧めしています。

4 ■ ツールは必要最小限で

ウェブサイト、ブログ、テレビ会議(skypeなど)、郵便など、交流にはあらゆる手段が活用できます。自分の学校、相手の学校のネットワーク環境によって使えるもの、使えないものがあります。

ここでのポイントは「顔が見える関係をつくる」ことです。直接会って交流できるのがいちばんですが、それが無理ならテレビ会議を、それも難しければ写真つきの自己紹介カードを活用するのもいいでしょう。子どもたちに相手の存在を実感させることが、交流学習の成否を決めます。

情報交換や話し合いには、ブログ等がもっとも手軽です。写真も添付できるので、調べたことを交換するのも簡単ですし、「この写真は何だろう」というところから意見交換を始めることもできます。テレビ会議は、相手とリアルタイムで顔の見えるやりとりができることが最大の魅力です。お互いがある場所の温度を測って温度計を見せたり、登校時の服装を比べたりするなど、目で見てわかる活動に取り組むこともできます。相手の発表をじっと聞いている時間は短くして、間に質疑をはさんだり、クイズ形式にするなど、双方向の感覚を大事にするのがポイントです。

II. 交流学習の「授業設計モデル」

もう少し長期間の交流学習をつくる場合は、次のような授業設計モデルを念頭においておくと、全体の見通しをもったり、ねらいを立てる際のめやすになるかもしれません。

1 ■ 手順モデル

【表3】(p.8)は、授業をつくるめやすとなる「手順モデル」です。必ずこの順番通りにしなければいけないわけではありませんが、おおよそこのステップを踏んでいくことで、一通りの交流学習を計画し、実践することができます。ただし、国際交流の場合、国によって教育制度が異なることもあり、この手順をゼロから踏んでいくのは難しいかもしれません。とくに、5のねらいは、国によってカリキュラムが違うので、同じレベルのねらいを設定するのではなく、それぞれが自分たちのカリキュラムに合わせたねらいを個別に設定したほうがいいでしょう。国際交流の場合は、まず最初に魅力的な活動をいっしょにイメージして、どこにどう学ぶを埋め込むかは、それぞれの学校ごとに決めたほうが、お互いにとって有益な交流にしやすいと思います。

[表3] 手順モデル

準備段階	1. 交流相手を見つける 交流の相手を見つけ、お互いの国、地域、学校の様子などの基本的な情報を交換する。
	2. 交流の素材・テーマを考える 国や地域や学習内容の違いから交流が引き立つテーマや、いっしょにできる活動を考える。
	3. 交流手段を選び、環境を整える テレビ会議、電子掲示板など使えるツールをリストアップし、児童・生徒のスキルを確認しておく。
	4. 交流活動を具体化し計画を立てる いっしょにする活動は何か、そのゴールをどんなものにするのかイメージを練る。月ごとにおおよその計画を立ててみる。
	5. ねらいを位置づけ、明確にする どの場面でどんな力を育てるのか、重点をはっきりさせる。教科と関連づける場合、単元、位置づけ方も検討しておく。
実践段階	6. 相手校と出会い、仲間意識を形成する 自己紹介カード、テレビ会議、直接交流など、顔が見える出合いを演出する。話題や活動を工夫し、仲間意識を育む。
	7. 学習者のコミュニケーションを点検する ふだんの学習で指導している話す力、聞く力を、相手のいる交流場面で確認する。情報モラルの指導も相手を意識したうえであわせて指導する。
	8. グループと役割分担を工夫する 学習内容、活動に合わせて、グループの組み合わせや、役割分担を検討する。
	9. 関わり合いをいかして追究の質を高める お互いが持ち寄った情報を比較させたり、つながりを考えさせることで、学習内容をもう一歩、深めてみる。
	10. 振り返りと展開を見通す場面を設ける ここまでの活動はうまくいったか、振り返りの機会をつくり、足りないところがあれば付け足してみる。
前提条件	0. 教師間の連携と周囲への説明をはかる 交流学習が成立するには、教師間の連携が大前提となる。事前の打ち合わせだけでなく、活動中の児童・生徒の様子、教師の関わり方など積極的に情報交換しながら進めていく。

特集「学びを深める交流」

2 ■ 枠組みモデル

[図3] は、交流学習の全体像を見渡すための枠組みモデルで、学校間交流学習の三つの要素(活動の視点)[図2](p.7)に、学習者が得るもの[図1](p.6)、教師のねらい[表2](p.6)、授業設計のレベルを対応させたものです。実際には、この三つはきれいに分かれているわけではありません。三つの層を下りたり、上がったたりしながら、実践していきます。この枠組みモデルをすぐに使いこなすのは難しいかもしれませんが、こういった枠組みや手順を意識して、交流の流れをイメージすると、以前より少しは見通しがもてるようになるかもしれません。

ここでご紹介したことすべてを「課題」として一つずつクリアしていくのは大変です。あくまでも「参考」としてみなさんの交流学習づくりに取り入れてみてください。[いながき・ただし]



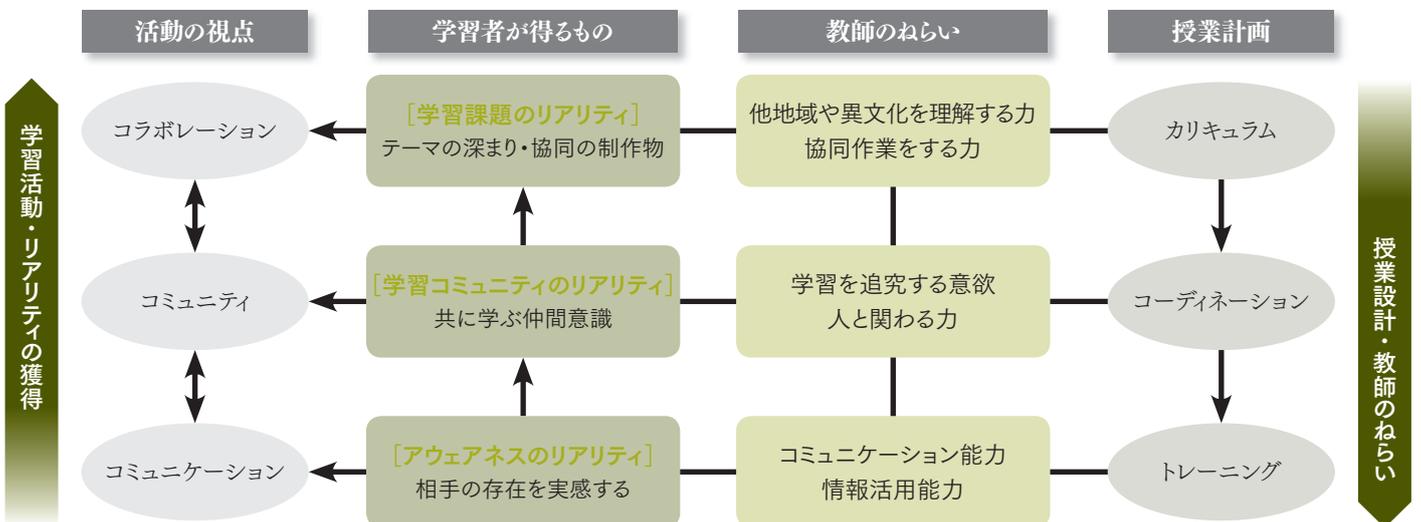
[もっと知りたい方へ]

- ◎ 文中で紹介した「学びのリアリティ」や「授業設計モデル」などをさらに深く理解したい方、交流学習の実践例をもっと知りたい方は、『学校間交流学習をはじめよう』(稲垣忠編著、日本文教出版、2004)をご覧ください。
- ◎ 稲垣先生が運営するウェブサイト「はじめよう! 学校間交流学習」には、交流学習に関するQ&A、ノウハウ・手立て集、リンク集(全国の交流プロジェクト、交流に使えるコミュニケーション・ツールへのリンク)、関連図書、ワークシートなどが掲載されています。ぜひご覧ください。
www.ina-lab.net/special/copo



- ◎ 稲垣先生はICTを活用した交流学習の教師研修も行っています。関心のある方は直接ご連絡ください。
電話:022-375-1180 (東北学院大学教養学部教育学研究室)
E-mail: tinagaki@mba.ocn.ne.jp

[図3] 枠組みモデル(稲垣ら、2006)



カベを乗り越えて 交流を 実現しよう!

交流学習や交流プロジェクトに取り組んでみたいと思っても、周囲の理解や協力がなかなか得られなかったり、カリキュラムが固まっていたり時間が確保できなかったり、予算を確保するのが難しかったり、さまざまなカベにぶつかって実現できないこともあるのではないのでしょうか。いざ、交流を始めることができても、インターネットで提供される便利なツールがセキュリティ上の問題で学校では使えなかったり、海外の国との交流で時差やことばの問題があったりなど、いろいろなハードルがあります。さまざまなカベを乗り越えて子どもたちに豊かな学びの機会を提供するために、どういう工夫や方法が考えられるのでしょうか。実際に交流学習や交流プロジェクトに取り組んでいる先生がたに聞きました。

1. 学校内や周囲の理解、協力

個人的にはやってみたいと思っても、同僚に、「次に引き継ぐ人が困るからやらないで」「仕事を増やさないで」と言われた経験のある先生もいるのではないのでしょうか。ある先生は、「いちばんのカベは周囲の無関心です。誰もうるさいことを言わないからやりやすいと思われがちですが、それは立ち上げの段階の話で、プロジェクトが動き出し、その内容を充実させ、継続させていこうと

いう段階になると、周囲の無関心がとても大きな障壁になることがわかってきます」と言います。周囲の理解と協力を得て交流を始め、内容を充実させ、継続させていくために、先生がたはどんな努力や工夫をしているのでしょうか。

1 管理職の理解を得る

管理職に意義や内容を魅力的に説明して、興味をもってもらう。

教育委員会が関わっている場合、教育委員会から校長に話をしてもらおう。

外部団体主催のプログラムやプロジェクトに参加する場合は、主催団体が学校向けの説明文を用意していることもあるので、問い合わせてみる。また、必要に応じて、直接、管理職や関係者に説明してもらおう。

2 同僚の協力を得る

まず、管理職の同意を得ておく。

生徒や学校にいかにも有益かということ、公式な会議ではなく、ふだんの会話のなかでさりげなくしながら、協力してくれる人を探す。

「とにかく俺といっしょにやってくれ」と言って仲間を3人つくっておく。

交流に参加する生徒の集団の長(学年主任など)の了解を得ておく。

職員会議等の大きな会議でやわらかく説明する。

自分が主体となって動く場合も、できるだけ多くの仲間に声をかけて協力してもらい、最後まで突き進む(可能であれば、外部の仲間の協力を得ることも大きな力になる)。

生徒会でも、教務でも、教科でも、影響力の大きい重鎮を取りこむ一方、若手職員にふだんから声をかけ、仲間や理解者を増やしておく。

授業で取り組む場合は、教科の同僚に交流の意義を切々と説く。

生徒に「おもしろかったよ」と言ってもらえるような活動を考える。生徒がやりたいと言うようになれば教師は動く。可能なら、生徒中心の国際交流委員会を立ち上げるなど、生徒が自主的に活動できるシステムをつくる。子どもたちが興味をもって主体的に活動に取り組む姿は、同僚だけでなく、学校の幹部や保護者、地域を動かしていくことにつながる。

周囲の協力は絶対に必要だが、必ずしも学校のなかだけで求めなくてもいい。その気になって探せば、日本でも世界でも、サポートしてくれる人や団体、企業はたくさんある。

3 保護者の理解を得る

外部団体主催のプロジェクトに参加する場合は、主催団体が保護者向けの説明文を用意していることもあるので、問い合わせてみる。

子どもたちが参加する意味を感じ、興味をもって取り組める活動づくりやサポートをする。子どもたちがプロジェクトの楽しさやおもしろさ、意義を家に帰って話すことが、保護者の理解やサポートにつながる。

保護者や地域の人にも参加の機会をつくったり、サポートしてもらったりして、プロジェクトに巻きこむ。

取り組みを地域のメディアに取り上げてもらおう。

4 担当教師の異動後も継続していくために

教師の個人的なネットワークで交流を始めた場合でも、姉妹校提携など学校間での正式な関係ができて、その体制のなかで交流できるようになると、担当教師が異動しても交流が「学校の財産」として残っていく。少しずつ、個人の取り組みから学校の取り組みに変えていき、学校のなかでメジャーな存在にしておく。

2. 予算不足

「公費には余裕がない」ことが多いようです。予算不足を解消するためにどのような工夫ができるのでしょうか。

PTA、同窓会、保護者にサポートしてもらおう。

外部団体や企業が実施しているプロジェクトがたくさんあるので積極的に利用する。

まず実績をつくってから、保護者のサポートが得られる国際交流協議会などを立ち上げる。

工夫をこらしてコストを減らす。たとえば、海外なら、国内より安く旅行できる方法はたくさんある。

ICTをうまく活用して経費を節約する。直接行き来できなくても、テレビ会議やビデオレター、メールを活用すれば中身をともなった交流ができる。

3. 交流学習の取り入れ方

実際に実践している先生がたは、交流学習をどのように取り入れているのでしょうか(交流学習のつくり方は、pp.6～8をご覧ください)。

まず、交流に取り組む自分なりの目的、活動の内容、交流相手を明確にする。次に、イベントとして実施するのか、継続的な学習として取り組むのか決める。継続的な学習の場合、短期(1ヵ月)、中期(3ヵ月)、長期(6ヵ月～1年)のどのパターンで取り組むか決める。さらに、どの集団を対象として取り組むのか考える(生徒の有志、クラブ、学級、学年、学校全体など)。

クラブや課外で取り組んでみて、ある程度の活動ができたなら、それを「選択」などの授業の時間でやってみる、次にほかの教師の協力を得ながら総合的な学習の時間などで取り組んでみるというように、徐々に規模を大きくしていく方法もある。

他教科と連携して交流に取り組むと、内容も深まり、プロジェクトも進めやすい。国際交流なら、英語などの外国語教科を軸にしつつ、たとえば、文化的な調べ学習は社会科、作品づくりは図工・美術と連携する。選択科目を設定し、国際交流に取り組んでいた学校も多かったが、新学習指導要領ではこうした時間の確保が難しくなる。総合的な学習の時間を校に探究的な学びとして位置づけ直す必要がある。「総合的な学習の時間やホームルームなどを何時間使って、他教科と連携した交流学習がこの程度できる」という実践のモデルをつくれれば、プロジェクトを定番化し、継続していける可能性が出てくる。

ふだんの授業のなかでも工夫すれば交流学習のための時間をつくることができる。たとえば、教師も児童・生徒も板書をやめて、あらかじめ教師が用意した資料や児童・生徒がノートに書いた宿題などを、直接プロジェクターや電子黒板で映せば、15分くらい時間を節約することもできる。この時間を、交流のための調べ学習や、交流相手にメールを書く、交流に必要なICTのスキルを高めるなどの活動にあてる。1回15分でも、継続していくことで、さまざまな活動が行える。

交流学習の取り入れ方を明確にイメージできない場合は、まず、財団やNPO、NGOなどの団体や企業が実施している交流プロジェクトを利用してみる。外部団体や企業が提供しているプロジェクトには、交流イベントだけでなく、学校内の活動(授業・授業外の両方)で継続的に取り組めるものもある。また、ウェブサイトにも活動づくりの流れや評価のための資料、生徒用のワークシート、具体的な実践例などを掲載していたり、実践に取り組む教師をサポートしている団体・企業もある。そういうプロジェクトに参加して外部のサ

ポートを受けながら実践するなかで、自分なりの交流学習の目的、取り入れ方、活動内容などを明確にしていく。

4. 海外の国との交流でおきてくること

相手校の先生とのやりとりや子ども同士の交流でことばのかべに苦勞したり、時差や学期の違いでスケジュールの調整がうまくいかなかった経験はありませんか。

1 ことばの問題

英語や中国語など、外国語担当の教師に協力してもらおう。

自治体の国際交流協会や学校のボランティア制度などを利用し、地域のボランティアに翻訳や通訳を手伝ってもらおう。外国語の得意な保護者の力を借りることも考えられる。その場合、教師個人が声をかけるより、校長から保護者に協力を依頼してもらい、公式に協力者として位置づけるようにする。ほかの分野でも保護者の専門性をいかすことは可能。いま学校と保護者の関係にはさまざまな問題があるが、このように、保護者が自分の子どもだけでなく、ほかの子どもの面倒もみる機会をつくと、自分の子ども以外にも関心を持ち、学校への理解や信頼を深めるきっかけにもなる。

子どもたちが、テレビ会議などリアルタイムの交流の場で外国語でコミュニケーションする準備ができていない場合は、メールやブログ、ビデオなど自分のペースで考えたり、書いたり、話したりできる交流でまず下地をつくり、自信をもたせる。ビデオレターなら、教師が相手の話していることをあらかじめテロップで入れておくこともできる。

ことばによる行き違いはたくさんあり、冷や汗をかくことも多い。しかし一度会って、自分のことを知ってもらえれば、後は同じ赤い血が流れているもの同士、

心が通う!

2 時差の問題

時差が大きいと、テレビ会議(skypeなど)の時間を設定するのが難しい。そういう場合は、ブログやメールを使って交流できるが、文字による交流だけでは相手の存在を意識しにくいので、自己紹介などのビデオレターを交換して「相手意識」を育む(「6. ICTツール利用の制限」の項も参照)。

3 学期の違い

あらかじめお互いの学校の年間スケジュールを確認し、いつごろ交流するか決めておく。

交流期間を、たとえば9月～3月など、双方の学校の休みが重ならない期間に限定してしまう。日本側は、4月から夏休みまでの間、相手の国について調べ学習をするなどして、9月からスムーズに交流活動に入れるよう準備しておく。

学期の違いを利用して、最初の活動で、お互いの国の休日や学校のスケジュールを紹介する。それだけでも異文化を知るおもしろさを経験できる。

4 なかなか返事が来ない……

メールを送ったのに返事が来ないこともよくある。システム上の問題でこちらのメールが届いていないこともあるし、文字化けしていることもある。もしかしたら、相手はすぐに返事をしなくても大丈夫と思っているかもしれない。メールを送って返事が来なくても、1回であきらめず、何回でもメールを送ってみる。いざとなったら電話もする。外部団体主催のプロジェクトに参加している場合は、主催団体に依頼して連絡をつける。

5. 外とのネットワークづくりと活用

学校内だけでなく、外部の団体や企業な

どの協力を得たいときは、どうやってアプローチすればいいのでしょうか。

必要と思われる人や団体には、アポイントメントをとって必ず会いに行く。会って話をするのが大切。必要なら海外でも行く。

とにかく汗をかいて人と会う。会った人に情熱を伝える。その人に情熱が伝わったら、その人がまた別のの人に伝えてくれる。それがネットワークになっていく。

外部団体が主催する交流学習や交流プロジェクトを利用して。最近では、NPOやNGO、財団などのほか、企業がCSR(企業の社会的責任を果たす活動)の一環として学校向けのプロジェクトを提供していることも多い。インターネットで探せば、いろいろなプロジェクトが見つかるので、内容や取り組みやすさ、自分の授業にどう取り入れられるかを考えてしぼりこむ。

(p.8で紹介した稲垣先生のウェブサイト「はじめよう! 学校間交流学習」にも、各団体が実施する交流プロジェクトが紹介されています。www.ina-lab.net/special/copo)

外部団体や企業の協力を得てプロジェクトに取り組む場合は、綿密に打ち合わせをして、お互いのねらいをすりあわせておくことが重要。この作業をやっておかないと、なかなか学校と団体・企業双方の目的に合った取り組みにならない。

6. ICTツール利用の制限

最近では、無料で利用できる便利なICTツールがたくさんありますが、管理職や周囲の先生に、インターネット上のツールを利用するのは危険だからやめておいたほうがいいと言われた先生も多いのではないでしょうか。学校によってはセキュリティが厳しく、アクセスやダウンロードができないケースもあるでしょう。(交流学習で利用できる基本的なICTについては、p.7、I-4を参照してください。)

ICTを使うことを前提にするのではなく、まず交流の意義を管理職や同僚と共有する。そのうえで、交流の手段としてICTツールも必要という流れになれば、ICTツールを使う意義を理解してもらえるので、アクセスが許可されるといった可能性も出てくる。

外部団体や企業などが教育向けに提供しているツールを利用する場合、その団体や企業に、ツールの安全性や個人情報取り扱いについて学校向けの説明書を用意しているか問い合わせてみる。

skypeなどのテレビ会議システムが、セキュリティやシステムの問題でどうしても使えない場合は、ビデオレターをつくってYouTubeなどの動画共有サービスにアップロードする。YouTubeを使う場合は、「メールアドレスを知っている人だけが見られる」限定公開機能を利用し、教師のメールアドレスを使う。YouTubeへのアクセスが遮断されている場合は、無料のファイル転送サービス(宅ファイル便<日本語>、firestorage<日本語>、Send This File<英語>)などを使って相手校の教師に送る。ファイル転送サービスは、ファイルの容量に制限があるが、ビデオレターの内容は1～2分でも十分。その程度の容量なら問題なく転送できる。

◎ この記事を作成するにあたり、東北学院大学の稲垣忠准教授、羽衣学園中学校・高等学校の米田謙三教諭、国際教育活動ネットワーク/REX-NETに所属する中高校の先生方の助言、協力を得ました。

REX-NETウェブサイトはこちら。 rexnet.loops.jp

